

## 「個」の再生へーヘッセにおける「母なるもの」と「ヨハネ黙示録」

田中 洋

### 要旨

Bis zu seinem Roman *Narziss und Goldmund* (1930) figuriert das Mütterliche als zentrales Thema Hermann Hesses (1877 - 1962). „Das Mütterliche“ ist ein kollektives Symbol der Mutter und „die blonde strahlende Frau“ eine konkrete Gestalt „des Mütterlichen“. Für *Narziss und Goldmund* war zuerst der Titel *Goldmunds Weg zur Mutter* vorgesehen, woraus erhellt, dass die Geschichte um das verlorenen Bild von Goldmunds Mutter kreist und dann in das Thema „des Mütterlichen“ übergeht. Zu Muttergestalten in Hesses mittleren und späten Werken liegen Arbeiten von Benett (1972) und Minkus (1997) vor. Am Leitfaden der Psychoanalyse Jungs vergleiche ich die Abhandlungen von Baumann (1997, 1999) und Ozawa (1982). Da die Psychoanalyse einen Schlüssel zum mittleren und späten Hesse liefert, orientiert sich die Interpretation in der vorliegenden Arbeit hauptsächlich an der Jungschen Archetypenlehre. Vergleicht man Hesses mittlere und späte Romane, etwa *Demian* mit *Narziss und Goldmund*, dann lassen sich bestimmte Bedeutungsveränderungen „des Mütterlichen“ beobachten. Um sie zu analysieren, wird auch die *Offenbarung des Johannes* aus dem Neuen Testament herangezogen, da sie einige wörtliche Anspielungen auf den behandelten Komplex „des Mütterlichen“ enthält.

キーワード：ヘルマン・ヘッセ，母なるもの，「ヨハネ黙示録」，C.G. ユング，個の再生

### 1. 1 本稿の目的

ヘッセにとって、「母なるもの」の獲得は最も重要なテーマであった。彼の母親との関係、また、作品にあらわれる母のイメージや女性たちの特異な役割が、これを如実に語っている。したがってヘッセ作品の分析に際して、「母なるもの」の観念をいかに解釈するかがとりわけ重要となる。本稿で扱う「母なるもの」とは、個々人の思い出、記憶、あるいは心象に残る具体的な母親の姿ではなく、規律、秩序などの父性原理に対し、世界を包み込むもの、そして自然を根底にもつ普遍的な観念である。ヘッセの初期作品においては、「永遠の母」としてその萌芽があらわれ、中期、すなわち『デミアン』(*Demian*, 1919) 前後においては「輝ける髪の女性」として描かれることが多くなり、『ナルチスと

ゴルトムント』(Narziss und Goldmund, 1930)に至るまで作品の鍵としてあらわれる。『ナルチスとゴルトムント』では、記憶のうちに埋もれてしまった主人公ゴルトムント自身の「母親の面影」の復活と、それに続く「永遠の母」、すなわち「母なるもの」を求める旅が描かれており、ヘッセはこの作品の執筆をもって、自身の内にある「母なるもの」の獲得というテーマへの、長年にわたる取り組みを完成させた。この作品が「母なるもの」と徹底的に向き合っていることは、『ゴルトムントの母への道』(Goldmund's Weg zur Mutter<sup>1)</sup>)という当初のタイトル案からも読み取れる。この持続的にあらわれるモチーフと、『ナルチスとゴルトムント』において「母なるもの」への対峙が終了することは何を意味するのであろうか。

「母なるもの」の特質は従来、ユングの個性化過程および太母元型<sup>2)</sup>を拠りどころとして解釈され<sup>3)</sup>、特に太母の「善い母・産む母」と「恐ろしい母・殺す母」の二つの側面が強調されてきた。本稿ではそうした蓄積を踏まえつつ、「母なるもの」の特質について、異なる視点から解釈を行なう。初期の作品においては、「母なるもの」の原型である「永遠の母」という観念が鍵となっており、その意味するところを確認する必要がある。また、続く『デミアン』や『ナルチスとゴルトムント』において、「母なるもの」が「輝ける髪の女性」という形象や、作中人物の幻視という形で繰り返し描かれ、個人や時代の再生を象徴する普遍的存在としてあらわれる様子を分析する。

従来のユング理論を基にした『デミアン』の作品解釈においては、「母なるもの」が大戦突入という黙示録的背景において幻視されることは、あまり重視されていない。本稿では、世界が破滅へと向かう兆しを見せる時代背景を踏まえ、その解釈に際して「ヨハネ黙示録」の「天の徴」という形象に手がかりを求める。従来の研究においてはヘッセと「ヨハネ黙示録」との関連は言及されていないに等しいといえるが、中後期ヘッセの作品を理解する上で、この関連性は注目に値する。Esselborn-Krumbiegelが指摘するように<sup>4)</sup>、『デミアン』終盤における壮大なヴィジョンを解釈するには、「ヨハネ黙示録」とのアナロジーは看過できない。また『デミアン』の壮大なヴィジョンのうちにあらわれている母のイメージは、『ナルチスとゴルトムント』において「輝ける髪の女性」として再びあらわれる。よって『ナルチスとゴルトムント』を解釈する上でも、同様に「ヨハネ黙示録」が有効であるといえる。ヘッセ作品における「母なるもの」の獲得というテーマはどのような遍歴を経て、完成を迎えたのかを考察したい。

## 1. 2 ヘッセと母、そして女性たち

「母なるもの」の考察にあたり、ヘッセの女性観の形成に大きな影響を与えた人々、すなわち、母、および妻となった女性たちに言及しておく必要がある。ヘッセが女性を語るとき、その中心にあるのは「母」である。父からよりもはるかに多くの性質を引き継いだと自身も語っているように<sup>5)</sup>、母マリーから多大な影響を受け、ヘッセは芸術の

人となった。しかし、宗教的に厳格であった母は、ヘッセが求めた母性との一体感を十分には与えてくれなかった<sup>6)</sup>。そのことが、ヘッセの作品における「真の母の像 (genuine mother-figures)」<sup>7)</sup>、あるいは「現実味を帯びた女性 (real-to-life women)」<sup>8)</sup>の不在と関わっている。女性像が奇妙に曖昧であったり、聖女や娼婦のように極端に歪んだ姿で登場したりする<sup>9)</sup>のは、彼自身の生い立ちに起因するのである<sup>10)</sup>。つまり、「母」は最も深いつながりを見出すべき存在でありながら、ヘッセは根源では「母なるもの」を欠いているのだ。多くの作品において「母なるもの」が探求されているのは、ヘッセの人生にとって「母なるもの」の獲得が一つの重要なテーマであったからに他ならない。それゆえ、「母なるもの」を解明することが、彼の作品を理解する上で重要なのである。

ヘッセは離婚を繰り返し、三度にも及ぶ結婚生活を送ったが、ここでも自身に欠落した「母なるもの」を追い求める姿勢が見られる。それぞれの妻との生活を経て、ヘッセの女性観は徐々に欠落を埋め、それに伴い、作品にみられる「母なるもの」の形象も変化してゆく。

一人目の妻、9歳年上であったマリーアにヘッセが惹きつけられたのは、母と同じように彼女もまた芸術の領域の人間であったこと、体格も気質も母に似ていたことが大きく関わっている。また、母の死の2年後に結婚したことは、マリーアに母を求めたことを意味する。つまり、母との関係において獲得できなかった「母なるもの」を補完する存在を求めて結婚したのである。この結婚は、第一次大戦の頃にどちらもが精神を病む形で破局へと向かう。その反動か、二人目の妻ルートは、ヘッセに似た気質を持った年下の女性だった。感受性がよく似た二人は、強い信頼関係を求めたようであるが、不幸にも、この20歳も年下の女性との結婚生活は3年たらずで終止符をうたれた。元来、人の精神を直接に支えるほどの強さがないヘッセにとって、20歳も年下の女性から頼られることは大きな負担であった。

この二人の妻と比べ、三人目の妻ニノンとの関係は大きく異なっている。ヘッセの長年の文通相手であったニノンは、『デミアン』発表直後の1920年頃にヘッセと直接会い、当時はどちらもそれぞれの家庭を持つ身であったが、ニノンはルートと別居していたヘッセを献身的に、しかし邪魔をすることなしに、親しい友人のように世話した。結婚後は、良き伴侶、また秘書として生涯を共にする。1927年に執筆が始められた『ナルチスとゴルトムント』はニノンとの生活の中で書かれており、この作品で「母なるもの」との対峙が終了することは、単なる偶然ではない。極端な女性像を描くことから始まった、「母なるもの」の獲得というテーマは、「母なるもの」への理解が実生活において深まり、生活が地に足の着いたものとなることで、徐々に近づいてくる。この時期をもって、作品においても自身の求めていた完成形を迎えたのだといえる。

## 2. 永遠の母

ヘッセ初期の作品にみられる「永遠の母」は、のちに「母なるもの」へと発展していくモチーフの原型といえる。「永遠の母」はたとえば初期作品である『クヌルプ』(*Knulp*, 1915)においてそのあらわれが確認できる。最終場面にて、雪山で横たわる主人公は、自然のうちに抱かれているかのように、あたかも母に抱かれているかのように感じており、この「母」こそが「永遠の母」のあらわれといえる。この段階における「永遠の母」とは非常に漠然とした観念であり、ヘッセ自身の「太古の母 (Urmutter) を『自然』と呼ぶことに、異論はありません」<sup>11)</sup>という言葉からも明らかであるように、「女性像」というよりは「自然」と同一視できる存在である。また、詩『孤独への道』(*Weg in die Einsamkeit*<sup>12)</sup>, 1918)においても「永遠の母」のあらわれは顕著である。第一連は「世界がおまえから離れ落ちてゆく。／おまえがかつて愛した／すべてのよろこびは燃え尽きてゆき、／その灰塵より闇が忍び出でる。」と歌い出される。「おまえ」は、これまで生きてきた世界から隔絶され、孤立し、異質なものに直面し、それを恐怖として経験することになるのである。この箇所は『デミアン』において両親に守られた「明るい・道徳的な世界」から、その対極にある、犯罪や死の恐怖に包まれた「暗い世界」ヘジクレアが転落する様子になぞらえて読むことができる。続く第二連前半は「お前は自身の内へと沈む、／心はすすまぬが、／ひとときわ力強い手に押され、／凍えながらおまえは、／死に絶えた世界に立つ。」となっている。第一連において、世界から孤立した「おまえ」は「自身の内へ沈む」とあるが、これは自身の奥深くに沈潜していくことを意味する。つまり「世界」とは現実のそれではなく、内面世界を意味している。「ひとときわ力強い手に押され」進んでいくことは、自身の積極的な姿勢というよりは、運命に急き立てられていることを意味するのであろう。すなわち、一度孤立して「死に絶えた世界」に立った「おまえ」は、その運命から逃れられない状況にあるのだ。この場面は、「内面への道」(*Weg nach Innen*<sup>13)</sup>)を求めるジンクレアが運命に突き動かされ、「明るい世界」と「暗い世界」という二元の対立を乗り越え彼岸を目指し、最終場面において自身の意識の奥深くに沈潜していき、暗い鏡の中に自身と同化したデミアンの姿を見出す場面を想起させる。また、続く後半部では「おまえの後ろから泣きながら、／失われたふるさとの追憶が吹いてくる、／子供らの声とやさしい愛の調べが。」と歌われている。運命に急き立てられる「おまえ」からかけ離れてしまった、幼年期の無邪気さ、「おまえ」がかつて取り巻いていた愛が、微かに思い出されるのである。ここでは、『ナルチスとゴルトムント』の前半部において、ゴルトムントの失われていた記憶が甦って来る様子が先取りされている。第三連は「孤独への道は苦しい、／おまえが思っていたよりもずっと。／夢の泉も涸れ果てている。／だが、信ぜよ！／道の終わりには故郷が待っていることを／死と再生が／墓と永遠の母が待っていることを。」と、後戻りのできない辛く長い道を歩む覚悟が歌われている。最終部の「死と再生」(*Tod und Wiedergeburt*) および、「墓と永遠の

母」(Grab und ewige Mutter)における語順は、それらの位置の重さと相俟って、「おまえ」が死を経て再生にあずかるであろうこと、つまり「故郷」(Heimat)へと帰還することを強く印象づけている。また、並列して述べられていることから窺えるように、「永遠の母」とは「再生」と同義である。すなわち、孤独者のたどる道は、「故郷」である「永遠の母」へと至り、「永遠の母」は孤独者を迎え入れて、「死と再生」を贈るのである。「永遠の母」へと至ることはまた、「自然」への回帰に等しい。『クヌルプ』におけるそれと同様に、ここにおける「永遠の母」もまた、その描写も踏まえるならば、明確な特徴づけがなされた「女性像」ではなく、漠然とした「自然」の観念のあらわれと見なすことができよう。

### 3. 母なるもの、または輝ける髪の女性

#### 3. 1 『デミアン』

前節で論及した「永遠の母」は、中後期の作品において「母なるもの」へと変容を遂げる。「母性」ないし「女性」の特徴が備わることで、「永遠の母」は未分化性を抜け出し、のちに「母なるもの」へと発達していくのである。1919年発表の『デミアン』において、「輝ける髪の女性」は「母なるもの」の形象としてあらわれ、作品の鍵となっている。『デミアン』は、父母に代表される伝統的倫理観に堅固に守られた「明るい世界」と、罪と欲が渦巻く、もう半分の黙殺された「暗い世界」との二極の狭間で、主人公ジントレアが苦悩し、その彼岸を目指す物語である。世界はこの二つの世界からなっており、そのどちらかだけでは成り立ち得ないこと、世界のこのような有りようを受け入れることが求められる。二極の対立を乗り越え新たな道を見出す試みは、この時期の作品より具体性を帯びてくる。

#### 3. 1. 1 ユング理論的解釈

「輝ける髪の女性」、すなわち「母なるもの」は先に述べたように、従来の研究では太母のあらわれと解釈されており、この一般的な解釈は、ヘッセがユングに傾倒していた時期に『デミアン』が書かれたことや、ユング派の精神分析を受けていたこと、またユング本人とも面識があったことを拠りどころとして定着している。ヘッセは『春の嵐』(Gertrude, 1909)を書いた当時、まだユングもフロイトも読んでいなかった<sup>14)</sup>が、それ以前から無意識や夢の作用に注目しており、作品においても精神分析を思わせる対話場面を描いていた。また、『デミアン』発表に先立ち、1918年にフランクフルト新聞に発表された『芸術家と精神分析』(Künstler und Psychoanalyse)においては、芸術作品と精神分析の相互作用についての興味深い考察がなされている。ヘッセは、作家や芸術家が、精神分析の理論を創作活動にそのまま応用することには賛成しなかったが、想像力、そして創造力を刺激する力と理解してこれを積極的に学ぶことには、共感を示していた<sup>15)</sup>。こうした事実を考慮にいれるならば、ユング理論を応用した解釈が数多くなされたこと

は妥当といえる。

『デミアン』終盤における幻視の内容もまた、ユング理論に基づく解釈がなされている。戦争が始まり、ある晩軍が占領した農場の前に歩哨として立っていたジंकレアは、夜空に巨大な「母なるもの」の姿を幻視する。その姿は「たくましく」、「山並みのように大き」いとされている。また「その大きな顔は、苦痛に歪んでいた。突然、彼女はかん高い叫び声をあげた」という描写は、この女性が産みの痛みに苦しんでいると受け取れる。従来の解釈では、この女性のイメージが太母の表れであり、ユングの個性化過程において最も統合困難な元型のひとつがここに表れている、とするに留めている<sup>16)</sup>。

個性化とは意識と無意識の統合のみならず、自己、自我そして元型といった要素を内に取り込んでいくプロセスを指し、従来は『デミアン』や『ナルチスとゴルトムント』といった中後期の作品展開を、このプロセスになぞらえた解釈が多くなされてきた。「太母」の統合に関してはその過程の第一段階として、まず母の胎内からもう一度生まれること、そして第二段階として「人類の母」(Urmutter)との幻想的な近親相姦を行うこと、がある<sup>17)</sup>。『デミアン』でのジंकレアはエヴァ夫人との邂逅において、第一段階をすでに終了している。第二段階はこの太母のヴィジョンを形づくることであるが、それは上で見たように、大戦の最中に空に大きな女性を幻視するという形で行われる。

### 3. 1. 2 「ヨハネ黙示録」

上述のユング理論を基とした幻視解釈においては、大戦突入という世界の危機的状況がその背景にあることについてはあまり触れられていない。しかし、世界が破滅へと向かう兆しを見せたその時代性と、幻視の場面において描かれた終末論的・黙示録的描写の象徴的な重なりは注視すべきものである。Esselborn-Krumbiegel は『デミアン』終盤における幻視において、「ヨハネ黙示録」におけるマリア、および大淫婦バビロン<sup>18)</sup>が一つとなっていると指摘し<sup>19)</sup>、これをアナロジーとして捉え、ヘッセと「ヨハネ黙示録」の関係に着目している。「ヨハネ黙示録」はキリストの再臨と神の国の到来を唯一の主題とし、その冒頭では、各地の教会へ自らの決断によって信仰に生き、キリストの前で自らを清めよ、という内容の手紙文が載せられており、引き続き使徒ヨハネ自身が幻視したキリストの再臨が比喻言語によって、すなわちイメージによって暗示的に語られている<sup>20)</sup>。本稿においても、Esselborn-Krumbiegel の着目点を有効なものとしてとりあげ、『デミアン』の幻視を「ヨハネ黙示録」の「天の徴」という形象への類似性に焦点をあて分析する。

まず、問題となる幻視の描写全体を引用する。幻視の内容だけでなく、幻視とその周辺描写を含めて検討するためである。

雲の中に大きな都市が見えた。そこから何百万という人があふれ出てきて、広い風

景いっぱい群がりつつ広がっていった。その中心へ、力強い、神の姿をしたものが歩み入ってきた。髪には輝ける星を（funkelnde Sterne im Haar）戴き、山並みのように大きく、そのおもごしはエヴァ夫人のものだった。人々の行列はこの女神の中へ、まるで巨大な穴へと吸い込まれていくかのように消えていき、いなくなってしまう。女神は大地にうずくまっていた。額のしるしが明るく微光を放っていた。彼女は何かの夢に支配されているようだった。女神は目を閉じ、その大きなかんばせは痛みのために歪んでいた。突然、彼女はかん高い叫び声をあげた。その額からは星が飛び散っていった。幾千のまばゆい星が<sup>21)</sup>。（傍線部筆者）

「雲の中」の「大きな都市」に「何百万という人」が現れ、その中心に「髪には輝ける星を戴い」た女性が現れ、人々は彼女の中へ「吸い込まれていくかのように消えていき」、消失してしまう。この都市の何百万の人間は、破滅へと向かう古い世界にある人々の象徴といえる。すなわち、大戦により旧体制が滅びゆく様が幻視されている。巨大な女性は滅びゆく世界の人々を呑み込み、そしてこの人々を産み落とし、この限りで旧時代の破壊・再生をもたらす象徴的存在であり、その幻視は新たな時代を予感させ、二元の対立の彼岸を予感させる意味を備えていた。まばゆい星となって「再生」し、この際、「母なるもの」は産みの痛みを伴っていた。初期作品において「自然」と同一視されていた「永遠の母」の観念は、ここにおいて具体的な形象へと発達していることが、この描写から読み取れよう。また、その額から星々が飛び散る様子は、吸い込まれていった人々―旧時代の象徴―が、まばゆい星となって「再生」することを意味する。

以上の考察を踏まえ、「ヨハネ黙示録」における幻視描写、「天の徴」を分析する。

また、天に大きなしるしが現れた。一人の女が身に太陽をまとい、月を足の下にし、頭には十二（筆者注：この数字は神の民の十二氏族を代表していることを示唆している<sup>22)</sup>）の星の冠をかぶっていた。女は身ごもっていたが、子を産む痛みと苦しみのため叫んでいた<sup>23)</sup>。

「しるし」は新約聖書においてしばしば「奇蹟」を意味するが、ここでは「幻」の意味である<sup>24)</sup>。そして、ここで幻視される「女」は、空に現れた「竜」に追われ地上に降り、神によって保護されるのだが、一般的に彼女は聖母マリアであると解釈されている<sup>25)</sup>。「女」はキリストを産み落とす。この、聖母からキリストが誕生するイメージは、聖書における「幻視」の預言的役割から、失われたキリストが聖母による出産を経て、再び甦るであろうこと、つまりはキリストの再臨を象徴的にあらわしている。またこの「女」は「メシアの母であると同時に、信者たちの母」<sup>26)</sup>でもあることから、キリストという「個の母」であると同時に、神の民、すなわち「全体の母」なのであり、その性質はへ

ッセにおける「母なるもの」に類する。ヨハネは「母なるもの」の形象である「大きな」、「星の冠をかぶった」女性を幻視しており、「母なるもの」は、「個」と「全体」の双方の「再生」へと向かっているといえる。（図 1）同様に、『デミアン』においてもまた「個」と「全体」の再生が目指されるが、完全に成就されるのは「全体の再生」までであり、「個

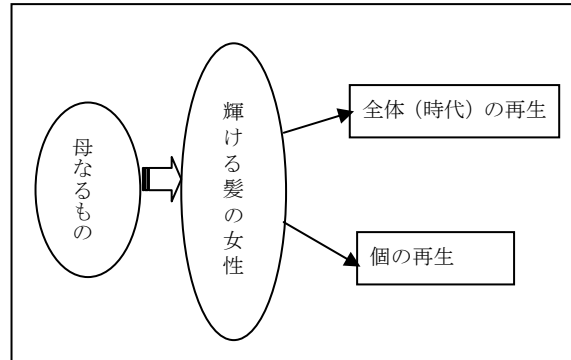


図1 「輝ける髪の女性」の示す二つの方向

の再生」には未到達である。この作品が、ジंकレアという個人の成長に、世界という全体の変容をなぞらえている点、また、「母なるもの」との取り組みが、夜空に巨大な女性のヴィジョンを幻視するという段階で終了し、それ以上進展がないままに物語が幕引きとなる点から、『デミアン』においては、「個の再生」はプロセスの途上で終了することが分かる。

### 3. 2 『ナルチスとゴルトムント』

「母なるもの」による再生が向かう、「全体」と「個」の志向のうち、『デミアン』において成就されたのは「全体」に留まっていた。そして、『ナルチスとゴルトムント』において、「個」の再生が成就される。

『ナルチスとゴルトムント』におけるゴルトムントの「輝ける髪の女性」の幻視は、『デミアン』終幕においての「髪に星を抱いた大きな女性」をジंकレアが幻視している構図を想起させる。ジंकレアとゴルトムントのどちらもある種の夢想状態にあり、眠りと覚醒の間の、まどろんだ半覚醒状態において強烈なヴィジョンを目にしている<sup>27)</sup>。

大きな、輝ける姿（die Große, Strahlende）を、花開いたような口をして、まばゆい光を放つ髪の（mit den leuchtenden Haaren）女の人を見た。彼は自身の母を見たのだった。（…）ああ、母よ！母よ！瓦礫の山、忘却の海は消え去った。王者のような、淡い青の瞳で、失われていた人は、いいようもなくいとしい人は再び彼を見つめていた<sup>28)</sup>。（傍線部筆者）

ゴルトムントはなおしばし眠らずに横たわっていた。しだいにまた心の中からさまざまなイメージが歩み出てきて、友の言葉が再び燃え上がった。そうして、魂の中にもう一度、ブロンドの輝く女性（die blonde strahlende Frau）があらわれた。それは母であった。その姿はフェーンのように、生命とぬくもりと深い警告の雲のように、



彼の心を吹き抜けた。ああ、母よ！ どうして母を忘れるなんてことができたのだろう<sup>29)</sup>！（傍線部筆者）

この二つの描写は、ナルチスによって母の記憶を呼び覚まされたゴルトムントの目覚めの段階におけるものである。この形象に「母なるもの」の細かな性質が刻み込まれておらず、「善い母」や「恐ろしい母」といった太母の諸特徴が特に現れていない点から、ここで現出するのは「母なるもの」というよりは、未分化な、自然と同一視できる、「永遠の母」に近い存在と判断できる。ゴルトムントが彫像の修行を経て、使徒ヨハネの像を完成させた後、「輝ける髪の女性」の形象は再び姿を現す。ここでの描写には、先の二つの『ナルチスとゴルトムント』からの引用と比べ、「恐ろしい母」の性質が顕著に見て取れる。

しかし、一つだけは残った。それは永遠の母、悲しくむごい愛の微笑をたたえた、太古の、そして永遠に若い母だった。彼はまたしても幾瞬間か母を見た。それは、髪の中に星を戴いた巨大な女性（eine Riesin, Sterne im Haar）で、世界の果てに夢見るように座りながら、手慰みに、花をひとつひとつ、命をひとつひとつ摘んでは、それをゆっくりと底なしの淵に落としていた<sup>30)</sup>。（傍線部筆者）

この引用における「永遠の母」という語は、「母なるもの」と同じ意味で使用されており、初期の『クヌルプ』で描かれていた、「女性像」の備わっていない、「自然」と同義の「永遠の母」とは、異なるレベルの語である。「むごい」愛の微笑を浮かべ、「手慰みに」、「命をひとつひとつ摘んで」、それを「底なしの淵に落として」いくという描写から分かるように、ここでの「永遠の母」すなわち「髪の中に星を戴いた大きな女性」は残酷さや死と結びついた存在である。「夢見るように座りながら」命を弄ぶ様は、無邪気さとそれゆえの残酷さ、死を与える性質を併存させ、「輝ける髪の女性」の残酷さを一層引き立てている。これらが太母元型の一側面である「善い母・産む母」に対するもう一つの側面、すなわち「恐ろしい母・殺す母」という特質である。子がその支配下にあつて、未発達な段階においては、太母は「聖母」であり善き保護者である。これは幼児が母との関係を良好に保っており、この間柄をかき乱していない（あるいは、まだそうするだけの力がない）ためである<sup>31)</sup>。子が発達してこの状態から抜け出そうとするとき、母は子を殺してでも自身のうちに取り返そうとする。では、なぜ子はそれにもかかわらずその母を熱望するのだろうか。それは太母が「禍いに導きかつ魅了する」<sup>32)</sup>ためであり、子はたとえ母に殺されたとしても、母の胎内に戻ることは安らぎであると感じ、その魅力に抗えないためである。「善い母」と「恐ろしい母」の二つの側面は「母なるもの」の内において併存しているのである。Benett<sup>33)</sup>、および小沢<sup>34)</sup>は『ナルチスとゴルトムント』

における「母なるもの」を太母の観点から解釈し、太母と同定しているが、その役割については漠然と、「再生」を成就させるものであると指摘するに留めている。それでは、「再生」はどのレベルで実現されたのであろうか。

『デミアン』において、二極の対立から彼岸、すなわち統一された新しい世界が目指される点は先に述べたとおりであるが、このことは『ナルチスとゴルトムント』においても同様である。理性の人間であり学者であるナルチスと感性和芸術の人であるゴルトムントの対比により「精神」と「自然」の二極が体现されており、ヘッセはこの作品で、再び彼岸への到達を試みている。『デミアン』においては、「明るい世界」と「暗い世界」の併存を受容することが、善悪を内包する神アブラクサスの存在によって象徴的に謳われたが、『ナルチスとゴルトムント』における二極を解消するのは、ナルチスとゴルトムントの二人自身である。

ナルチスに招かれ修道院に戻ってきたゴルトムントは、ナルチスと幾度か対話を重ねる。その内容は主に、二人が別々の道を歩むことになった原因である互いの性質、即ち「精神」と「自然」の差異に関するものであったが、それは物語序盤における「精神」と「自然」を対立概念とした会話とは異なるレベルで行われる。「精神」と「自然」は近く、そしてこれらは互いに含み合う関係にあるという認識を、二人は共有しているからである。それはゴルトムントの「よい芸術作品の原型は実存の人物ではない。実存の人物はそのきっかけになりうるかもしれないとしても。——原型は肉と血ではなく、精神的だ」<sup>35)</sup>という言葉にあらわれている。「精神」と「自然」の互いに含み合う構造は、ナルチスとゴルトムントという名のもつ意味においても、予めほのめかされている。ナルチスは自身の性質の別な面、すなわち「自然」をゴルトムントに見ており、ゴルトムントに自身の失われた自己を投影している存在である。また、ナルチスの語源であるナルキッソスは、感覚の代表者でありながら、Hsiaによれば、この物語においてナルチスは「精神」の代表者であり<sup>36)</sup>、精神と自然という二つの領域をつないでいる。これに対しゴルトムントは「黄金の口、クリュソストモスと称される古代ギリシア教会最大の説教家、アンティオキアのヨアンネス」<sup>37)</sup>という、本来は精神に仕える人間を名の由来<sup>38)</sup>としながら、この物語では感覚の代表者となっている点も合わせると、どちらも自身の名の語源の反対の極にある名を冠しており、これにより「精神」と「自然」が互いに含まれ合う状態が象徴的に表されているといえる。この相互に内包される構造は、Hsiaの述べる太極の構造になぞらえることができる。太極とは万物の根源であり、ここから陰陽の二元が生ずるとされ、二つの円が互いに吸い込まれるような図で描かれる。Hsiaは原初の母イヴが、この陰陽原理を体现するとしている<sup>39)</sup>。ゴルトムントは芸術を通して「イヴの像」すなわち、「精神」と「自然」の融和状態に至ることを試みたのである。

この二極の融和から導き出されるのは、内的に統一された世界、すなわち「母なるもの」の姿である。ゴルトムントは母の記憶を取り戻し、「母なるもの」への道が開かれる。

ユング解釈はこれらを元にした「母なるもの」の特質の分析に特化しており、「善い母・産む母」と「恐ろしい母・殺す母」という両側面を備えた太母は、「母なるもの」の母親として保護する性質や、象徴的に胎内へ回帰するために現実世界においては死を与えるといった性質を備えている点を明らかにした。終幕においてゴルトムントは、ナルチスに見守られ、死と引き換えに「母なるもの」を獲得する。「母なるもの」の獲得とは、自身のうちに在りながらまた自分を包み込む母イメージの存在を、自身のうちにしかと認識することである。『デミアン』においては「母なるもの」への途上であった「個」は、『ナルチスとゴルトムント』においてようやくその目的を果たす。それは『孤独への道』において描かれた、「故郷」への帰還に等しく、「個」は再生したのである。

#### 4. おわりに

「母なるもの」とは、「自然」、「母性」、「太母」、「極化する世界を包みこみ再生をもたらすもの」というように、様々に捉えられる観念であり、本稿での扱いも流動的であった。これはヘッセ自身、渴望した「母なるもの」の様相がつかめず、作品において繰り返しあらわしたモチーフでありながら、常にその様相が変化していったためである。

ユング理論の「太母」という観点から、『デミアン』での幻視は解釈され、さらに、「ヨハネ黙示録」を手がかりにすることで、「母なるもの」は「全体」と「個」の二つの方向の再生へ働きかけていることが明らかとなった。『デミアン』期においては世界の破滅とその再生の予兆、すなわち「全体の再生」が描かれており、『ナルチスとゴルトムント』においては、人生の終焉における内的世界との一体感、すなわち「個の再生」が描かれていると分析できる。『デミアン』においてはユング的な人格の統合は果たされたが、「母なるもの」は「全体の再生」の象徴として現れ、「個の再生」は予感される段階に留まっていた。ヘッセは、『デミアン』においては、まだ最後の一步を踏みだしていない<sup>41)</sup>のであり、「個」の再生は『ナルチスとゴルトムント』においてはじめて成就される。『ナルチスとゴルトムント』における「個の再生」への取り組みは、初期から中期における、運命に翻弄されて不安のまま生を探っていく姿勢から、生に対して意識的に関わる姿勢へと生まれ変わるのである。戦時という特異な時代背景により、「全体・時代」の再生が主題として扱われていた中期においても、その深層には「個の再生」の探求が常にあり、『ナルチスとゴルトムント』において、ようやく成就されたといえる。この作品をもって、ヘッセが長年取り組んできた「母なるもの」の獲得というテーマは完成を迎えたのである。

#### 註

本稿は、2008年6月15日に立教大学において開催された日本ヘルマン・ヘッセ友の会・研究会2008年度春季総会における研究発表に基づき、執筆・再構成を施したものである。本稿におけるヘッセの著作、ならびにその他欧文の引用はすべて拙訳である。

- 1) Bernhard Zeller, *Hermann Hesse. Stationen seines Lebens, des Werks und seiner Wirkung*, Ernst Klett, Stuttgart, 1977, S.229
- 2) A. サミュエルズ『ユング心理学辞典』によれば、太母とは、集合的な文化経験から引き出された一般的なイメージに対する命名である。イメージとして元型的性格を十二分に発揮し、肯定—否定の両極性（圏点筆者）をあらわにする。肯定の極にまとめあげられる特質は、次のようなものである。「母親らしい心くばり、いたわり。女性特有の呪術的な権威。理性を超えた智恵と霊の高揚。助けとなる本能、衝動。慈悲深いものすべて、育み、支え、成長と豊饒を促進するすべてのもの」、つまり「善い母」である。したがって否定的な極には、「恐ろしい母」が来る。「すべての秘密、隠蔽、暗黒。奈落、死者の国。呑み込み、誘惑し、害をなし、運命のように逃れられない、身の毛のよだつものすべて」である。
- 3) ゴルトムントが放浪の旅で出会う女性たちは各段階のアニマに相当しており、各段階を経てアニマの最終段階、すなわち女性的であると同時に男性的な冷たさを兼ね備えている「叡智のアニマ」に至るのだという分析が、ユング理論を応用した先行研究の一例としてある。（小沢幸夫「ヘッセ文学における女性像の変遷と母の像——『ナルチスとゴルトムント』を中心に」）
- 4) Esselborn - Krumbiegel は *Erläuterungen und Dokumente. Hermann Hesse. „Demian. Die Geschichte von Emil Sinclairs Jugend“*において、『デミアン』と「ヨハネの黙示録」の関連性を指摘している。
- 5) 高橋健二『ヘルマン・ヘッセ——危機の詩人——』新潮社、1974年、17頁。
- 6) 神学校から脱走し、15歳のとき拳銃自殺を図るなどして両親を悩ませたヘッセは、18歳でデュービンゲンの書店員として働くようになり、ほどなくして自作の詩のコピーを両親の元へ送るようになった。母は詩の構成については褒めたものの、「…ところで神はどこにいるの?」と問い、次の手紙ではさらに辛辣に「神に向き合いなさい、そしてもっと正しくありなさい!」と書き送ってきた。これに怒ったヘッセは母からの手紙を全て焼いた。数年後母へ捧げる詩集を出版したものの、その直前の母の葬儀に出られぬまま死別している。
- 7) Elke Minkus, *Traces of motherhood in Hesse's works*. Summary of the lecture held in German by Elke Minkus at the Hermann Hesse Colloquium in Calw, May 9, 1997. Summary by Hajo Smit. HHP(Hermann Hesse-Page), available from <http://www.gss.ucsb.edu/projects/hesse/papers/minkus5.html> [Internet]; accessed 12 July 2007, pp.3  
一つ明確な像として母親が現れることがあまりない、という意味で Minkus はこのように述べていると考えられる。
- 8) Ibid.  
登場人物としての女性がモノローグで内面を吐露したり、自身の心情について詳細に語ったりする、といった場面がなく、男性の登場人物の描写と比べて実体性に欠けることを Minkus は意味しているのだろう。
- 9) Ibid.  
この記述は特に、『デミアン』終盤において主人公ジンクレアが幻視するヴィジョンを念頭においていると考えられる。
- 10) Ibid.
- 11) Hermann Hesse, *Brief an Herrn K. J. F.*, Köln, April 1956, *Ausgewählte Briefe*, Frankfurt a.M., Suhrkamp, 1974, S.465
- 12) Hermann Hesse, *Die Gedichte*, *Gesammelte Schriften*, Bd. 5, Frankfurt a.M., Suhrkamp, 1978, S.638f
- 13) これは1931年にゾーアカンブより出版された一卷本の小説集のタイトルであり、かつこの言

- 葉はヘッセの命題そのものと言える。小説集自体には『子供の心』(*Kinderseele*, 1919)、『クラインとヴァーグナー』(*Klein und Wagner*, 1919)、『クリングゾルの最後の夏』(*Klingsors letzter Sommer*, 1920)そして『シッダルタ』(*Siddhartha*, 1922)が収められている。
- 14) 高橋、上掲書、131 頁。
  - 15) Hermann Hesse, *Betrachtungen*, Gesammelte Schriften, Bd. 7, Frankfurt a.M., Suhrkamp, 1978, S.139ff
  - 16) V. J.ベニット (内尾一美他訳)「ヘルマン・ヘッセ作品における女性の役割」, YUNOCA (山口大学学術機関リポジトリ), available from <http://repository.oai.yamaguchi-u.ac.jp/yunoca/B05/B050000000305.pdf> [Internet]; accessed 30 June 2008, pp.12
  - 17) Günter Baumann, *Hermann Hesses ‚Demian‘ im Lichte der Psychologie C.G.Jungs*. HHP (Hermann Hesse-Page), available from <http://www.gss.ucsb.edu/projects/hesse/papers3.html> [Internet]; accessed 13 January 2005, S. 11
  - 18) 「ヨハネの黙示録 17-4」以降現れる、ローマ帝国を象徴した存在であり、12 章で語られるキリストの母マリアの反対像である。その姿は金と宝石と真珠で飾られ、姦淫の盛られた金の杯を手に行っている、と描写されている。
  - 19) Helga Esselborn-Krumbiegel, *Erläuterungen und Dokumente. Hermann Hesse ‚Demian. Die Geschichte von Emil Sinclairs Jugend‘*: Philipp Reclam jun. Stuttgart, 1991, S.44
  - 20) 泉治典『ヨハネの黙示録を読む―再臨と神の国』新教出版社、2003 年、21 頁。
  - 21) Hermann Hesse: *Demian*: Gesammelte Schriften; Bd. 3, Frankfurt a.M., Suhrkamp, 1978, S.255
  - 22) エドワルト・ローゼ (高橋三郎他訳)『NTD 新約聖書註解 (11) ヨハネの黙示録』NTD 新約聖書註解刊行委員会、1973 年、133 頁。
  - 23) 「ヨハネの黙示録 12-1」『聖書 新共同訳―旧約聖書続編つき』
  - 24) 保坂高殿他訳『新約聖書V パウロの名による書簡 公同書簡 ヨハネの黙示録』岩波書店、1996 年、222 頁。
  - 25) 『新約聖書V パウロの名による書簡 公同書簡 ヨハネの黙示録』によると、「女」が示す内容については諸説あり、これを「マリア」であるとするのもその解釈の一つである。
  - 26) ローゼ、上掲書、134 頁。
  - 27) 『デミアン』直後に書かれた詩『病気』(*Krankheit*, 1921)においても、『デミアン』における「輝ける髪の女性」と酷似した形象が見られ、「わが母は髪に星を抱いている」(*Meine Mutter hat Sterne im Haar*)と表現されている。この詩において、『デミアン』の後半部においてジンクレアが幻視した巨大な女性とほぼ同内容の描写がなされている。この形象との取り組みは中・後期の作品の間にも一貫して続けられていたのである。
  - 28) Hermann Hesse, *Narziss und Goldmund*. Gesammelte Schriften, Bd. 5, Frankfurt a.M., Suhrkamp, 1978, S.59f
  - 29) Ibid., S. 61
  - 30) Ibid., S.194
  - 31) エリッヒ・ノイマン (福島章、町沢静夫他訳)『グレートマザー ― 無意識の女性像の現象学』ナツメ社、1982 年、88 頁。
  - 32) ノイマン、上掲書、110 頁。
  - 33) V. J. ベニット (内尾一美他訳)「ヘルマン・ヘッセ作品における女性の役割(IV)」, YUNOCA (山口大学学術機関リポジトリ), available from <http://repository.oai.yamaguchi-u.ac.jp/yunoca/B05/B0500000000605.pdf> [Internet]; accessed 30 June 2008, pp.12
  - 34) 小沢幸夫「ヘッセ文学における女性像の変遷と母の像——『ナルチスとゴルトムント』を中

心に」滝沢寿一・井出貢夫・児島公一郎共編『ヘルマン・ヘッセをめぐる その深層心理と人間像』三修社、1982年、165-170頁。

35) Hesse, *Narziss und Goldmund*, S.279

36) Adrian Hsia, *Hermann Hesse und China*, Suhrkamp, 1974, S.260

37) E. ダーガン（中嶋正昭訳）『世界説教史 I 古代—14世紀』教文館、1994年、52頁。

38) Hesse, *Narziss und Goldmund*, S.39

39) Hsia, S.260

『ナルチスとゴルトムント』における「精神」と「自然」の二元を太極における陰陽の二元になぞらえ、太極を「二元が融合している状態」の象徴としている点で、筆者は Hsia の論に賛同するが、「精神」を「陽」に、そして「自然」を「陰」に対応させている点に関しては、異を唱えたい。「陽」には「精神、静」といった属性がありながら、これは同時に「悪魔、上昇」をもあらわす。そもそも東洋を起源とする思想であることからして、陰陽二元論を西洋のヘッセの思想に完全に当てはめることは不可能なのである。

41) 小沢、上掲書、129頁。